金剛寶戒寺便

令和三年十一月一日発行　第九十二号
https://www.houkaiji.jp

檀信徒の皆さま、こんにちは。気がつけば今年も残りも二カ月、コロナウィルスに意思があるが如く急に感染者が減ってきました。このままの収束を願うばかりです。

さて、十月の講習会では「良書に学ぶ」と題して村上和雄さんの「生命の暗号」をご紹介いたしました。私がこの本を手にしたのは今から二十五年くらい前ですので、科学の進歩とともに少し内容が古くなっている所もありますが、生命の神秘をお伝えするには良書と思い取り上げました。

村上氏は筑波大学の名誉教授で高血圧の黒幕である酵素「レニン」の遺伝子解読を成し遂げた方です。元々は農学博士でしたが、研究過程において遺伝子工学なども取り入れ、遺伝子研究にも尽力されました。

皆さんは「遺伝」と言うと親から子、もしくは隔世遺伝の様に祖父母から孫へなど肉体的に伝えられるものをイメージするかもしれません。私たちの肉体は約三十七兆個の細胞から成り立っており、大まかにいうと水分が六割、タンパク質と脂質が一、五割ずつ位から出来ています。その細胞一つ一つに遺伝子が備わっており、遺伝子の主な働きは身体を構成するタンパク質を作り出すことです。不思議なのは爪と心臓は全く似ても似つかわないのに、それらを作り出す基本単位の細胞まで細分化すると全く同じ作りの細胞が一方では爪になり、他方では心臓を作り出しているのです。全く異なる働きをする器官に見えても、おおもとは同じで、全ての遺伝子や細胞にはあらゆる身体の一部になり得る要素を持っているということなのです。また「火事場のバカ力」の言葉の通り、人間は時としてあり得ない力を発揮したり、一晩で髪の毛が真っ白になってしまことがありますが、これらも全て遺伝子の仕業と言えます。つまり遺伝子が爪になるスイッチを、心臓になるスイッチを、通常では考えられない力を発揮したり、髪の毛が一気に白くなる細胞のスイッチをオンにすることで変化を起こしているのです。

この様に遺伝子は親子間での引継ぎの他にも、環境因子により様々な変化を起こします。そしてそれは、食事や副流煙などの物理的な環境ばかりではなく、精神的な環境にも大きな影響を受けスイッチのオン・オフが行われるそうです。例えば「笑い」が癌のキラー細胞を活性化すると言った話を耳にしたことがあるかもしれませんが、これも遺伝子の働きと言えます。

それでは良い遺伝子をオンにし、悪い遺伝子をオフにするためにはどうしたら良いかと言うと、物事には必ず二面性があることに気がつく事が重要であると述べています。例えば病気になるという事は負の面ばかりに目が行きがちですが、人の優しさや、お蔭、縁、他力に目が向くきっかけを作ってくれることがあります。また望まぬ事故や決別も、大事故になる前に抑えることが出来たり、謙虚になるきっかけを与えてくれることがあるという事を知るのが大切だと述べています。この様な考え方が、遺伝子のスイッチを望ましい方に入れると共に生活を豊かにすると氏は述べています。

そして最後に科学による遺伝子暗号の解読は素晴らしいけれども、研究を重ねていくと、それ以上にこの遺伝子暗号を書いた存在に畏敬の念を感じると述べています。なぜならば科学はクローン技術などにより生物のコピーを作ることは出来ても、未だに大腸菌一つでさえ生み出すことが出来ないからです。大腸菌の構成要素は全て分かっていても、そこに命を宿すことが科学には出来ないのです。氏はそこに「大いなる存在」を感じ、「サムシング・グレート」と呼んでいます。

十二月八日（水曜日）十四時より
演題　「良書に学ぶ」

サムシング・グレートとは、「いのちの親の親、その親は生命の親の様な存在です。」既存の言葉でいうなれば神や仏、当に大日如来そのものです。若かりし頃、科学の世界に神仏の存在を感じ取ることが出来、嬉しくてページを進ませていたのを思い出しました。